

「新鮮な野菜を

消費者に届けたい」

有機栽培コスモス会の挑戦



「道の駅とつじょう」や「東条温泉とつじょう」で、新鮮で安全な野菜を直売されている「有機栽培コスモス会」。

野菜の生産や直売を通じて生まれる会員同士の交流が、地域の活性化にもつながっているその活動についてご紹介します。

「野菜でまちを

元気にしたいね」



道の駅を元気に

ひょうご東条インターチェンジを中心とした新しいまちづくりが進められていた南山地区で、人と交通の交流拠点となる道の駅の建設が計画された頃から、道の駅をいかに賑やかなものにするかという課題に対して、行政だけでなく地域の人も、いろいろな方法を模索しました。

そして、旧東条町内のさまざまな農業者団体が組織される東条農業者連合の役員が中心となり、有機野菜の直売を行う計画が進められました。その生産・直売を行う団体として平成七年に設立されたのが、有機栽培コスモス会（以下コスモス会）です。設立は趣旨に賛同した農業者を会員として自主的に行われたもので、当初の会員数は二十人程度でした。

直売がスタート

農業者だけで自主的に設立したため、最初はさまざまな苦労があったようです。会のルールづくりや金銭面の管理、道の駅オープンまでの販売場所の確保など、すべて会員で行わなければなりませんでした。

とどろき荘の前で始まった小規模なコスモス会の直売。困難に直面する会員を勇気づけたのは、野菜の売れ行きでした。

「とどろき荘を訪れる人と、コスモス会の客層が一致していた」。コスモス会会長の鷹尾義博さんはそう要

道の駅オープン

平成十二年、コスモス会の活動に大きな転機が訪れました。待望の「道の駅とつじょう」がオープンしたのです。これでコスモス会の直売所はとどろき荘と道の駅の二か所になりました。

この頃にはすでに会員数は五十人を超えており、販売できる品目・商品量ともに充実したものになっていました。道の駅を訪れる多くの人の多様なニーズに応えることが十分可能でした。

道の駅がオープンしたときから駅長を務められている岡田和一さんは、当時をこう振り返られます。「コスモス会の野菜の直売は、できたばかりでまわりには何も無かった道の駅に人を呼ぶ大きな力になりました。」

地元だけでなく、遠くの地域からも人を呼ぶコスモス会の有機野菜。「道の駅を、そして地域を元気にしたい」。農業者の熱い思いが、道の駅に活気を与えました。

とどろき荘前の小さなテントで、会員のみなさんの手作りで始まったコスモス会の直売は、ここに大きな成果をあげることができたのです。